

譬話の伝授

〔知性の世代相続のために〕

稲賀繁美

美術／比較文化

庭石の配置ということがある。めぐり歩く回遊の順序に従って視界が開け、光景が揺れ動く。そのなかで、それぞれの場所に、ふさわしい石を適切な位置に配列する。おそらくそれは、整然と並べるなどといった操作よりは数等倍むつかしい「藝当」である。内田義彦という経済史家は、そうした機微を弁えていた稀有な存在といってよい。そして彼はそれを、しばしば、あたかもさりげないことのようにやってのけた。裏に苦心を隠しつつ。

大小も違えば形状も異なり、肌触りや色つやにいたるまで様々な自然石を、ある空間に落ち着かせるといった技術。それは単に素材を機械的に同じ寸法に切り詰め、タイルのように並べて均一な平面を作ることではない。選ばれたそれぞれの石塊はそれぞれに自己主張するが、おのずと主たる座を占める石、それに寄り添うことで引き立つ石、空間

に読みの流れを描く石と、定まってくる。序列からはずれて隅に捨てられる輩も現れるが、これらの捨石が実際には全体をきり引き締める要の役割を果たしもある。そしてこればかりは、実地に石どもと格闘して、矯めつ眇めつ（たが）の試行錯誤を繰り返さぬ限り実現できない。あらかじめ設計図を描いて、そのとおりに施工すれば事足りる、といった生易しい技ではない。

実はこれ、一本の論文あるいはおおよそ「ものづくり」一般を為す際の要諦でもある。

大学の教養課程の授業で、初心者がともすれば陥りがちな思い込みや弊害に捕われたとき、そうした固定観念からかれらを脱出させるのに、何が有効か。ふと思いついて使うのが譬（たと）はなしたが、それらがよくよく考えると内田義彦經由で仕込んだネタだったことに思い至る。

空間の配置に続いて時間の読みに話を移すならば、例えば桐生の機屋さんの話がある（一八〇頁）。

機屋さんは銀座にファッション・ショーを見に出かける。ウィンドウに飾ってある見本はそのままでは世間で通用はしない。それを十倍も百倍も希釈したものが、初めて一般に普及する商品となる。だがそのいわば原液を確認し、店を廻ると流行の方向が見えてくる。次の季節、翌年に何が流行るかが予測できる。これはデザイナーならずともファッションに敏感な方ならば実感がおありだろう。抽象と理論構築に関するこうした話題は、頭脳の片隅に記憶しておくのと重宝する。試してみるがよい。新年に香港にでもゆくと、春になって日本列島で何色の服が流行るか、素人でも数か月は早読みできる。これがプロとなれば、その前年から次の年の戦略を練っておくことになる。それは目星を立てつつ、そこからわざと必要なだけ方向を逸らせて、自らの商品の先行き予測を立てる「自己実現の予言」だ。

「僧正と三人の隠者の話」はトルストイ經由で知られる民話だが、これにもずいぶんお世話になった（六八頁）。高德の僧正が離れ島の三人の隠者に祈禱の文句を教える。ようやく暗唱しようなので島を去ると、突然背後の彼方が光り輝く。何事ならんと見やると、件の隠者たちが海上を

滑空して僧正の船に近づいてくる。船べりに辿りついた彼らは僧正にこう訴える。せっかく教えてもらった祈禱の文句を忘れてしまったので、もう一度唱えて欲しいと。僧正は十字を切ってこう答えたという。信心深い隠者たちよ、汝らの願いはすでに天に届いておる。今更自分がそなたたちに教えることなどない、と。

この有名な逸話、果たして内田義彦經由で入手したのかどうかも、今や定かでない。だが起源の探索よりも大切なのは、この譬の伝えるメッセージだろう。仏教説話は東西に伝播して世界を周回した。起源も不確かな変遷を経た譬の或るものは、イスラーム圏を経てキリスト教の外伝に変わって、それと同一起源と想定される逸話が反対に中国經由で『今昔物語』にも辿りつく。天草版のイソップ説話には、そうした逸話が東廻りと西廻りで再度遭遇した事例もある。なかには起源の物語には存在しなかった教訓が、伝播の過程で加算された折節さえ見受けられる。真理は啓示の起源から流出するだけではない。むしろ真理への帰依の「行」のうちに、ふと顕現する。そうした伝承の動態を理解するうえで、トルストイが再話した民話が孕む教訓は貴重だろう。それはまた、内田義彦をいかに次の世代が読み継いでゆくべきかを、暗に物語る。

一九五七年生。国際日本文化研究センター教授。著書『絵画の黄昏——エドヴァール・マネ没後の闘争』『絵画の東方——オリエンタリズムからジャポニスムへ』『絵画の臨界——近代東アジア美術史の極端と命運』三部作（名古屋大学出版会）他。

内田義彦が生を受けた一九一三年は岡倉覺三の没年でもあった。覺三の『茶の本』にみえる「伯牙の琴馴らし」の逸話を述べる紙面はもはやないが、内田はそれを大塚久雄経由で語っている(一一〇頁)。学統とは異なった学術の秘事伝授である。太古からの歴史の記憶を蔵した大樹。そこから作られた琴は、その記憶を甦らせる楽器として蘇生する。ここで大塚は史実に語らせる秘術を説き、内田はそこから、専門の聴き耳と無念夢想の聞く耳との往還へと話題を転じる。過去の声に未来の命を宿らせる秘訣である。宿痾の食道癌治療のための集中治療室滞在から最後の生

還を果たしたおり、内田義彦は、生命維持装置の騒音の内に、初めて *Lebenswesen* という言葉の語感を実感しえたと、嬉々として報告している。継承される生命の本質に肉薄した内田義彦の学問的生命を、今こそ引き継ぎたい。「伯牙の琴」は、我々の手に委ねられているのだから。

* 括弧内の頁数は、内田義彦『生きること 学ぶこと』藤原書店、二〇〇〇年相当頁数。本稿の一部は、シルクロードの交易都市、トゥルファンでの移動学会で披露したところ、ジャック・ル・ゴフやウンベルト・エーコらからお褒めに与った。一言ご披露して、生前直接に嚙咳には接しなかった内田義彦の学恩に、遥かに感謝する便(よすが)としたい。